

半七捕物帳

冬の金魚

岡本綺堂

青空文庫

一

五月のはじめに赤坂をたずねると、半七老人は格子のまえに立って、稗ひえまきうり時売の荷をひやかしていた。わたしの顔をみると笑いながら会えしやく釈して、その稗時ひえまきうりのひと鉢を持って内へはいつて、ばあやにいいつけて幾らかの代を払わせて、自分は先に立って私をいつもの横六畳へ案内した。

「急に夏らしくなりましたね」と、老人は青々した小さい鉢を縁側に置きながら云った。「しかし此の頃はなんでも早くなりましたね。新暦の五月のはじめにもう稗時ひえまきうりを売りにくる。苗屋の声も四月の末からきこえるんだから驚きますよ。ゆうべも一ツ木の御縁日に行ったら、金魚屋が出ていました。人間の気が短くなって来たから、誰も彼も競争で早く早くとあせるんですね。わたくし共のようなむかし者の眼からみると……これでも昔は氣のみじかい方だったんですがね……むやみに息ぜわしくなつて、まわり燈籠の追っかけつくらを見せられているようですよ。この分では今にお正月の床の間に金魚鉢でも飾るようになるかも知れませんね。いや、今の人のことばかり云つちやあいられません。むかしも寒

中に金魚をながめていた人もあつたんですよ」

「天水桶にでも飼って置いたんですか」と、わたしは訊きいた。

「いや、天水桶の金魚は珍らしくもありません。大きい天水桶ならば底の方に沈んで、寒
いあいだでも凌いでいられますからね。こんにちでは厚い硝子ガラスの容れ物に飼って、日あた
りのいいところに出しておけば、冬でも立派に生きています。しかし昔はそんなことをよ
く知らないもんですから、ビードロの容れものに金魚を飼うなんて贅沢な人も少なかった
ようです。たまにあつたところで、それはやっぱり夏場だけのことでした。ところが、又
いろいろのことを考え出す人間があつて、寒い時にも金魚を売るものがある。それは湯の
なかで生きている金魚だというんだから、珍らしいわけですね。文化文政のころに流行はや
つて、一旦すたれて、それが又江戸の末になつてちよつと流行つたことがあります。しよせ
んは一時の珍らしいものの好きで長くはつづかないんですが、それでも流行るときには馬鹿
に高い値段で売り買いが出来る。例の万年青おもとや兔とおなじわけで、理窟も何もあつたもの
じゃありません。そう、そう、その金魚ではこんな話がありましたよ」

お玉ヶ池の伝説はむかしから有名であるが、その旧跡は定かでない。地名としては神田

まつえちよう
松枝町のあたりを総称して、俗にお玉ヶ池と呼んでいたのである。その地名が人の注意をひく上に、そこには大窪詩仏や梁川星巖やながわせいがんのような詩人が住んでいた。鋏形蕙齋くわがたけいさいや山田芳洲のような画家も住んでいた。撃剣家では俗にお玉ヶ池の先生という千葉周作の道場もあった。それらの人達の名によつて、お玉ヶ池の名は江戸時代にいよいよ広く知られていた。

これは勿論、それらの人々と肩をならぶべくもないが、俳諧の宗匠としては相当に知られている。松下庵しょうかあん其月きげつというのがやはりこのお玉ヶ池に住んでいた。この辺はむかしの大きい池をうずめた名残なごりとみえて、そこに小さい池のようなものがたくさんあった。其月の庭には蛙も棲んでいられるくらいの小さい池があつて、本人はそれがお玉ヶ池の旧跡だと称していたが、どうも信用が出来ないという噂が多かつた。かれはその池のほとりに小さい松をうえて、松下庵と号していたのであるが、その点を乞ひに来る者も相当あつて、俳諧の宗匠としては先ず人なみに暮らしていた。

弘化三年十一月のなかばである。時雨しぐれという題で一句ほしいような陰くもつた日の午ひるすぎに、三十四五の瘦せた男が其月宗匠の机のまゝに黒い顔をつき出した。

「おまえさんに少しお願いがあるんですがね」

かれは道具屋の惣八という男で、掛物や色紙短冊も多年取りあつかっている商売上の関係から、この家の門を度々くぐっているのであった。其月は机の上にうずたかく積んである俳諧の巻をすこし片寄せながら微笑んだ。

「惣八さんのお願いで、また何か掘り出しものの売り込みかね。おまえさんの物はこのごろどうも筋が悪いといつて、どこでも評判がよくないようだぜ」

「ところが、これは大丈夫、正銘まがいなしの折紙付きという代物です。宗匠、まあ御覧ください」

風呂敷をあけて勿体らしく取り出したのは、芭蕉の「枯枝に鳥のとまりけり秋の暮」の短冊であった。それが真物でないことは其月にもひと目で判った。もう一つは其角の筆で「十五から酒飲みそめて今日の月」の短冊で、これには其月もすこし首をかたむけたが、やはり疑わしい点が多かった。其月は無言で二枚の短冊を惣八のまえに押し戻すと、その顔つきで大抵察したらしく、惣八は失望したように云った。

「いけませんかえ」

「はは、大抵こんなことだろうと思つた。承知していながら、押つかぶせようというのだから罪が深い」と、其月は取り合わないように笑つていた。

「どつかへ御世話は願えないでしょうか」

其月はだまって頭かぶりをふった。

「困ったな」と、惣八はあたまを搔いていた。「其角の方もいけませんかしら」

「どうもむずかしい」

「やれ、やれ」と、惣八は詰まらなそうにしまい始めた。「ところで、もう一つ御相談があるんですがね」

今度の相談は例の金魚で、寒中でも湯のなかで生きている朱錦しゆきんのつがいがあつた。それをどこへか売り込む口はあるまいか。売り手は二匹八両二歩と云つてるのであるが、二歩はたしかに負ける。八両で売り込んでくれれば、宗匠にも二両のお礼をするのであつた。其月はまた笑つた。

「おまえも慾がふかい男だ。商売のほかいろいろの儲け口をあせるのだな」

「世が悪くなりましたからね。本業ばかりじゃ立ち行きませんよ」と、惣八も笑つた。

「ねえ、宗匠。この方はどうでしょう」

それは其月にも心あたりが無いでもなかつた。その金魚がほんものならば何処へか世話をしてやつてもいいと答えると、惣八は急に顔の色を直した。

「ありがたい。是非一つお骨折りをねがいます。売り主も大事にしているんですから、その買手がきまり次第、持つて来てお目にかけます。このごろの相場として雌雄二匹で八両ならば安いやすいものです。十両から十四五両なんていうばかばかしい飛び値がありますからね。流行物はやりものというものは不思議ですよ」

「まったく不思議だね」

話が済んで、惣八が帰りかけると、出合いがしらに十七八の小綺麗な女が帰つて来た。かれは女中のお葉ようであつた。其月は今年四十六で、五年まえに妻をうしなつたので、その後は女中と二人暮らしである。お葉は千住せんじゆの生まれで、女中奉公をしている女としては顔や形も尋常に出来ているので、主人が独り身であるだけに、近所でもとかくの噂を立てる者もあつた。惣八も時々にかれにからかうことがあるので、きょうも下駄はを穿きながら云つた。

「やあ、お部屋さま、お帰りだね」

「若い者にからかつてはいけない」と、其月はうしろからまじめに云つた。

惣八は首をちぢめて惣そう々に門を出た。外にはもう雨がふり出していたが、お葉は傘を持つてゆけとも云わなかつた。惣八が横町の角を曲がったかと思うころに、時雨しぐれは音をた

てて降つて来た。

二

それから半月あまりを過ぎた十二月のはじめに、お玉ヶ池に一つの事件がしゅったい出い来きして、近所の人たちをおどろかした。松下庵其月の家で、主人は何者にか斬り殺されて、女中のお葉は庭の池に沈んでいたのである。ふだんから普通の奉公人でないらしく思われているだけに、近所ではまたいろいろの噂を立てた。検視の役人は出張した。自分の縄張り内であるから、半七もすぐに駆け付けた。

俳諧師の庵いおりというだけに、家の作りはなかなか風雅に出来ていたが、其月の宅は広くなかった。門のなかには二十坪ほどの庭があつて、その半分は水みず苔こけの青い池になっていた。玄関のない家で、女中部屋の三畳、そのほかには主人が机をひかえている四畳半と、茶の間の六畳と、畳の数はそれだけに過ぎなかった。近所ではこの椿事ちんじをちつとも知らなかつたのであるが、かの道具屋の惣八が早朝にたずねて来て、枝折戸しおりどのようになっている門を推おすと、門はいつものように明いたので、なんの気もつかずにはいつて行くと、松の木の

根もとに女の帯の端がみえた。不思議に思つて覗いてみると、その帯は紅い尾をひいたように池の薄氷のなかに沈んでいるのであった。試みにその帯の端をつかんで引くと、それは人間のからだに巻きついていてらしい手応えがしたので、惣八はびっくりした。

まえにも云う通り、玄関のない家で、すぐに四畳半の座敷へ通うようになっていたので、惣八はあわててその雨戸を叩こうとすると、それまでもなく、雨戸は末の一枚が半分ほど明けてあつたので、彼はそのあいだから内をのぞくと、小さい机は横さまに傾いて倒れて、筆や筆立や硯のたぐいが散乱しているなかに、宗匠の其月はすこし斜めに仰向けに倒れていた。かれの半身はなま血に塗れて、そこらに散っている俳諧の巻までも蘇枋染めにしていたので、惣八は腰がぬけるほどに驚いた。かれは這うように表へ逃げ出して、近所の人を呼び立てた。こういうわけで、惣八は第一の発見者である係り合いから、町内の自身番に留められていろいろの詮議をうけたが、彼はこの以外にはなんにも知らないと申し立てた。

この椿事が夜なかに起つたのでないのは、主人の部屋にも女中部屋にも寝床が敷いてないのを見ても察せられた。其月は机のまえに坐つて、朱筆を持って俳諧の巻の点をしているところを、うしろからそつと忍び寄つて、刃物でその喉を斬つた。おどろいて振り向く

ところを、更にその頸筋を斬つたらしい。其月の死にざまは先ずそれで大抵わかったが、お葉はどうして死んだのか、ちよつと見当がつかなかった。自分で身を投げたのか、他人ひとに投げ込まれたのか、それすらも判らなかつた。池から引き揚げられた彼女の死骸には傷のあとも見いだされなかつた。

家内に紛失物もないらしいのを見ると、この惨劇が物取りでないこともほぼ想像された。主人の其月もまだ老い朽ちたという年でもないから、ひとり者の主人と若い奉公人のあいだに、近所で噂するような関係があつたとすれば、なにかの事情から、お葉が主人を殺害して、自分も身を投げて死んだものと認められないでもない。ほかに情夫おとこでもあつて、お葉が主人を殺したのならば、当人が自滅する筈はあるまい。あるいは何者かが其月を殺し、あわせてお葉を池のなかへ投げ込んだのかも知れない。下手人げしゆにんが手をおろさずとも、お葉がおどろいて逃げ廻るはずみに、自分で足をすべらして転ころげ落ちたのかも知れない。しかし表の戸も明けてあり、寢床も敷いてないのであるから、それが宵のうちの出来事らしく思われるにも拘らず、近所隣りでこれほどの騒さわぎを知らなかつたというのは少し不思議であるが、大事件が人の知らない間に案外やすやす易々と仕遂げられた例はこれまでもしばしばあるので、検視の役人たちもその点にはさのみ疑いを置かなかつた。ただ、其月を殺

したのはお葉の仕業か、あるいは主人も奉公人も他人の手にかかったのか、この事件の疑問は専らその一点に置かれているので、水にぬれたお葉の死骸は念を入れて検められたが、別に手がかりとなるようなものも見いだされなかった。しかしその死骸が水を飲んでいるのを見ると、息のあるうちに沈んだことだけは確かめられた。

「どうでしょう。この池を搔掘りさせるわけには行ききまずまいか」と、半七は云った。

池の底にどんな秘密がひそんでいないとも限らないので、役人たちもすぐに同意した。人足どもを呼びあつめて、師走の寒い日にその池の搔掘りをはじめると、水の深さは一丈を越えていて、底の方から大小の緋鯉や真鯉が跳ね出して来たが、そのほかにはこれというような掘出し物もなかった。お葉のさしていたらしい櫛が一枚あらわれた。小半日をついやして、これだけの獲物しかないのです、役人たちも失望した。それから家内を隈なく狷つてみたが、どこも皆きちんと片付いていて別に取り散らしたような形跡もみえなかった。差しあたりはこの以上に詮議のしようもないので、あとの探索は半七にまかせて、役人たちは一且引き揚げた。

半七はあとに残つて、其月の身許しらべに取りかかった。かれの親類や、かれの弟子や、出入りの者や、それらの住所姓名を一々に調べることにした。子分の庄太を千住へやつて、

お葉の身許もしらべさせた。検視が済んでも、誰かその始末をする者がなくては、二つの死骸をどうすることも出来ないので、家主と近所の者四、五人があつまつて来て、ともかくもその死骸の番をしていることになった。半七も坐つていた。みじかい冬の日がもう暮れかかる頃になって、其月の弟子たちがだんだんに寄つて来たが、かれらは不慮の出来事におどろき呆れているばかりで、どの人の口からも何かの手がかりになるような新らしい材料をあたえてくれなかつた。あかりの点く頃に半七はそこを出て、町内の自身番へゆくと、道具屋の惣八は飛んだ係り合いで、まだそこに留められているので、番屋の炉のそばに寒そうに竦すくんでいた。

「道具屋さん。お気の毒だね。節季せつきしわす師走のいそがしい最中に、いつまでも留められていやあ困るだろう。もういい加減に帰つちやあどうだね」

「帰つてもよろしゅうございませうか」と、惣八は生きかえたように云つた。

「どうで直ぐには埒らちがあきそうもねえから、用があつたら又よび出すとして、今夜はいつたん帰つたらよかろう」

「ありがとうございます。お呼び出しがあればきつと直ぐにまいります」と、惣八はあわてて帰り支度にかかつた。

「だが、ちよいと待つてくんねえ」と、半七は声をかけた。「すこし訊ききてえことがある。こつちでも手を入れて調べさせてはあるが、あのお葉という女中、あれは唯の奉公人じゃあるめえ、主人と係り合いがあるんだらうね」

「どうもそうらしいという評判です。わたくしもよくは知りませんが……」と、惣八はいまいに答えた。

「長ちようねん年ねんしているのかえ」

「おととし頃から来ているように思います。ことしはたしか十八になりました。そんなことはお弟子のうちでも其ぎちよう蝶ようという人がよく知っている筈です」

其蝶は本名を長次郎といって、惣八と同商売の尾張屋という家うちの惣領息子であるが、俳諧に凝りかたまつて店の仕事は碌々見向きもしないので、おやじが去年死んだ後、おふくろは親類と相談の上で、妹娘のお花に婿をとつて、其蝶の長次郎は別居させることになった。其蝶も結局それを仕合わせにして、若隠居というほどの気楽な身分でもないが、ともかくも柳原に近いと小さい家を借りて、店の方から月々いくらかの小遣いを貰つて暮らしている。しかしそれだけでは勝手向きが十分でないので、来年の春には師匠の其月をうしろ楯に、立りゆうき机ぎの披露をさせて貰つて、一人前の俳諧の点者として世をわたる筈に

なっている。かれは今年二十六で、女房も持たず、下女もおかず、六畳と四畳半とふた間の家に所謂いわゆるひとり者の暢気のんきな生活をしているとのことであった。

「その其蝶とお葉とおかしいようなことはあるめえな」と、半七は笑いながら訊きいた。

「さあ」と、惣八もすこし考えていた。「そんなことは知りません。其蝶は師匠の家へ足を近く出入りはしてはいますが、まさかにそんなことはないでしょう。風流一方に凝りかたまっている偏人ですからね」

「あの宗匠は都合がいいかえ」

「相前に名前も売れていて、点をたのみに来るものも随分あるようですから、困るようなことはありますまい。いい弟子や、いい出入り先もありますから、内職のほうでも又相当の収入みいりがあるようです」

「内職とはなんだえ。掛物や短冊の売り込みかえ」

「まあ、そうです」と、惣八はうなずいた。「わたくし共もときどきに持ち込みますが、筋のいい物でさえあれば大抵どこへか縁付けてくれます」

「おまえさん、この頃に何か持ち込んだかえ」

「へえ」と、惣八はなんだか詞ことばをにごしていた。

「隠しちやあいけねえ。正直に云つてくれ。ほんとうに何か持ち込んだのかよ」

「芭蕉と其角の短冊を持って行きました」

「それだけかえ。そうして、それはどうした」

「どうも筋がよくないというので、取り合つてくれませんでした」と、惣八はにが笑いをした。

店さきのうす暗い行燈あんどうのひかりで、半七はその顔色をじっと睨んでいたが、やがて少しく形をあらためた。

「おい、惣八。おめえはなぜ隠す。短冊や色紙のほかに、あの宗匠のところへ何か持ち込んだものがあるだろう。正直に云わねえじやあいけねえ」

「へえ」

「へえじやあねえ。はつきり云いねえ。下手へたに唾つばを呑み込んでいると、いつまでも帰さねえよ」

ずいぶん悪摺れのしているらしい惣八も、半七に睨まれてさすがにうろたえた。なにぶんにも相手が相手であるので、なまじい隠し立てをしてはよくないと早くも観念したらしく、かれは正直に白状した。

「実はわたくしもそれに就いて少々迷惑していることがありますので……。それで今朝も宗匠のところへ出かけますと、あの一件で……。いや、どうも驚いているのでございます」

それは例の金魚の一条であった。芭蕉と其角の短冊は問題にされなかつたが、金魚の方は心あたりがあるというので、四、五日経つてから惣八は再びその模様を探りに行くと、其月はその売れ口があると云つたので、惣八はよろこんで歸つて、早速その売り主の元吉というのを連れて行くことになつた。一番ひとつがの朱錦を小さい塗桶のようなものに入れて、元吉が大切にかかえて行つた。見たところ普通の金魚と変らないのであるから、まず眼のまゝで試ためしてみなければならぬというので、其月の家ではありあわせの銅かなだら盥らいに湯を入れて持ち出した。湯のなかで生きていられるといつても熱湯ではとても堪まらないのであるから、売り主はいくらに湯加減をして置いて、さてその金魚を放してみると、二匹ながら紅い尾を振つて威勢よく泳ぎまわつたので、其月も得とく心しんした。惣八も今更のように感心した。これでいよいよ其月の手でどこへか売り込んでくれることに決まつたが、其月はその売り先を明かさなかつた。わたしにあずけて置いて下されば、きつと云い値で売つてあげると云つた。かれが売りさきを明かさないのは、おそらくこつちの云い値以上に売り込んで、そのあいだで幾らかの儲けを見るつもりであろうと察したので、惣八らも

深く詮議しなかつた。売り込みで儲けた上に、こつちからも約束の礼金を取つて、其月は二重の利益を得るわけであるが、それはめずらしくもないことであるので、惣八らも怪しまなかつた。ふたりは何分おねがい申すと云つて、かの金魚をあずけて帰ると、それから又五、六日の後にお葉が使に来て、惣八にいつでも来てくれと云うので、かれはすぐに出かけてゆくと、其月は金魚の代金八両二分をとどこおりなく渡してくれた。惣八ははじめの約束通りに、そのうちから二両の礼金を置いて帰つた。

これで片が付いたと思つていると、三日ほどの後に又もお葉が迎えに来たので、惣八は何ごころなく行つてみると、其月がひどくむずかしい顔をして待つていた。そうしておまえは多年わたしの家に入りをしていながら、実に怪けしからん男だ。あんないかさま物を持ち込んで来て、人をぺてんにかけてとは何事だと、あたまから嘔ど鳴りつけた。惣八は面喰らつて、その仔細をだんだんに聞き糺すと、かの金魚は普通のもので、湯のなかで生きるものではないというのであつた。なるほど、ここで試ためした時には無事であり、先方へ持つて行つて試した時にも無事であつたが、金魚は二匹ながらその翌日死んでしまつた。察するにこれは普通の金魚の肌へ何か薬をぬりつけて、一時を誤魔化したものに相違ない。その薬がだんだん剥はげるにしたがつて、金魚は弱つて死んだのであろう。そんな騙かたりめい

たことをして済むと思うか。第一、売り先に対してわたしが目目を失うことになる。この始末はどうしてくれると、其月はひたいに青い筋をうねらせて手きびしく責めた。

「親分の前ですが、その時はまったく困りましたよ」と、惣八は今更のように溜息をついた。

三

「すると、その金魚がすぐに死んだので、宗匠は先方に申し訳がないと云うんだね」と、半七はすこし考えていた。「だが、もともと生き物のことだ。飼いようが悪くって死なねえとも限らねえ。時候の加減で斃おちねえとも云われねえ。金魚だって病気もする、それを一途いちずにこつちのせいにされちやあ困るじやあねえか」

「それを云つたのでございますよ」と、惣八は訴えるように云つた。「ところが、宗匠はどうしても肯きいてくれないで、なんでも贖物を売つたに相違ない。ふだんが不断だから、おまえの云うことはあて的にならないと……」

「不断よつほどまやかし物を持ち込んでいるとみえるね」

「御冗談を……」と、惣八はあわてて打ち消した。「まったくあの宗匠はいっつく一國で、一旦こうと云い出したが最後、なんと云つても承知しないんですから」

「それからどうした」

「どうにもこうにもしようがありません。といつて、あの宗匠の家の出入りを止められると、これからの商売にもちつと差しさわることもありますので、よんどころなしに御無理ごもつとも一旦は引きさがつて来て、とりあえず売り主の元吉にその話をしますと、元吉も素直には承知しません。つまりお前さんが仰しやつたと同じような理窟を云つてるので、わたくしも両方の仲に立つて困つてしまいました、実は今朝ほどもそのことで宗匠の家へ出かけて行くとあの一件で……。かさねがさね驚いているのでございます」

「一体その売り主の元吉というのは何者だえ」

「本所の金魚屋の甥でございまして、自分は千住に住んで居ります」と、惣八は説明した。「そこも自分の叔母の家で、その二階に厄介になつていて、まあこれといつて決まった商売もないのですが、叔父が金魚屋で、その方の手から出たというのですから、今度の金魚もまあ間違ひはないと思つて居るのです。当人も決していかさま物ではないと云うのですが、わたくしも何分その方は素しろうと人のこと、実のところはどつちがどうとも確かには判

らないので困って居ります」

「元吉というのは幾つだ」

「二十三でございましょう」

「そうか。まあ、そのくらいでよかろう。じゃあ、また呼び出したらすぐに来てくれ」

「かしこまりました」

籠から放された鳥のように、惣八は忽々に出て行った。そのうしろ姿を見送って、半七は炉のそばで煙草を二、三服つづけて吸っていると、背のたかい男がうす暗い表から覗いた。それは子分の松吉であった。

「親分、いま帰りました」

「やあ、御苦労、寒かつたろう。まあ、火のそばへ来い」

「まったく冷えますねえ。風はないが、身にしみませ。近いうちに雪かも知れませんよ」と、松吉は店へあがつて炉のまえに坐った。

「この寒空に金魚を売ろうの、買おうのと、つまらねえ道楽をするから、いろいろの騒動がしゅったい出しゅったい来しゅったいするんだ」と、半七はにが笑いした。「そこで、どうだ。ちつとは当りが付いたか」

「まあ、こんなことですがね」

松吉が首を伸ばしてささやくのを聞くと、其月の家の女中のお葉は千住の荒物屋の娘で、家にはおまんという母と、今年十三になる源吉という弟がある。お葉は一昨年うの春から初う奉公いぼこうで近所の水戸屋という煙草屋の女中に住み込んだ。水戸屋は古い店で、商売のほか田地などを持っているので、土地でも相当に幅をきかせていたが、主人は四、五年前に死んで、今はおむつという女あるじである。お葉はそこに小一年ほど奉公していたが、その年の暮に暇を取って、あくる年の三月からお玉ヶ池の其月の家へ二度目の奉公をするこ
とになった。お葉が水戸屋を立ち去ったのは、自分の方から暇を取ったのではない。主人の甥とあまり睦まじくすることが主人の眼にとまって、出代りどきを待たずに暇を出され
たらしいと云う者もある。お玉ヶ池へ行つてからは、去年の盆の宿さがりに千住の家へ一
度帰つて来ただけで、今年になつては正月にも盆にも顔をみせない。主人の家が無人で、
めつたに出られないというのであつた。

松吉がゆき着く前に、お玉ヶ池の近所の人から知らせて来たので、お葉の家ではもう娘
の変死を知っていたが、あいにく母のおまんは風邪かぜをひいて四、五日前から寝込んでいる。
弟の源吉はまだ子供でどうすることも出来ないので、日が暮れてから近所の人たちが死骸

を引き取りにくる筈になっている。松吉は病人の枕もとへ行つていろいろ詮議したが、まえにも云つた通りでお葉はこの頃めつたに帰つて来ない。母は二度ばかりもお玉ヶ池へたずねて行つたが、主人の其月はいつも留守であつたので、一体どんな人であるか、その顔さえも見識しらない。そういうわけであるから、主人の家の事情などはなんにも知らない。勿論、主人と娘とのあいだにどんな関係があるか、ちつとも知ろう筈はないとおまんは云つた。かれは正直な田舎風の女で、嘘をつきそうにも見えないので、松吉は先ずそのくらいにして引き揚げて来た。

「その煙草屋の甥というのは、本所の金魚屋の親類で、元吉という奴じゃあねえか」と、半七は訊きいた。

「そうです。そうです。元吉というんです。親分はもう聞き込みましたかえ」

「道具屋の惣八から聴いた。そいつから惣八にたのんで、惣八から宗匠にたのんで、どこへか金魚を売り込んだことがあるそうだ」

冬の金魚の一件を聞かされて、松吉は幾たびかうなずいた。

「わかりやした。するとその元吉が宗匠を殺やつたんでしよう」

「おめえはそう思うか」

「だつて親分」と、松吉は声をひそめた。「そいつの売り込んだ金魚は勿論いか物に相違ありません。それで一杯食わせようとしたところが、やり損じて化けの皮があらわれて、宗匠からはむずかしく談じ付けられる。所詮しよせんは売った金を返さなければならねえはめ羽目になつたが、もう其の金は使つてしまつて一文もねえ。苦しまぎれに悪気をおこして……。ねえ、そこらでしよう。ところで、お葉という女は、その元吉と前々から出来合つているので、男の手引きをして主人を殺させたのでしよう」

「むむ」と、半七はかんがえていた。「そうすると、そのお葉はどうして死んだ。元吉が殺したのか」

「まあ、そうでしょうね。手引きをさせて宗匠を殺したものの、この女を生かして置くど露頭の基だと思つて、なにか油断させて置いて、不意に池のなかへ突き落したのでしよう。違いますかえ」

「なるほどうまく筋道は立つな。じゃあ、おめえはその積りで元吉の方をしらべてくれ」
「すぐに引き挙げてようがすかえ」

「馬鹿をいえ」と、半七は笑つた。「ひとりで将棋をさすように、自分でばかり決めてかかつてもいけねえ。確かな証拠も無しにむやみにそんなことをすると、旦那方に叱られる

ぞ。まあおちついて仕事をしろ。庄太はどうした。あいつにも片棒かつがせろ」

「あい。ようがす」

十とおに九つはこつちの物だという顔をして、松吉は威勢よく出て行つた。もう一度、宗匠の家へ行つてその後の模様を見とどけて来ようと思つて、半七もつづいて表へ出ると、風のない夜ではあるが凍り付くような寒さが身にしみた。それも師走の宵だけに、往來の提灯のかげが忙がしそうに行き違つているなかを、半七は考えながらしずかに歩いて行つた。「やつぱりひよる松の鑑定があたつていゝかな」

其月の家には大勢の人があつまつていた。半七が出たあとでだんだんにその門人や知人などが寄つて来たらしく、茶の間の六畳と女中部屋の三畳とに押し合つて坐つていた。どれもみな男の顔であつた。近所の人らしい女二、三人が狭い台所でなにか立ち働いていた。四畳半には主人と女中との死骸がならべてあつて、お葉の家からはまだ誰も引き取りに來ないとのことであつた。雨戸はみな閉め切つてあるので、線香の煙りは家うちじゆうにうずまいて流れていた。

とても割り込んで坐るような席はないので、半七は台所へ廻つて、流し元のあがりがまち框かまちに腰をかけていると、ひとりの女房が手あぶりの火鉢を持って来てくれた。

「どうもお寒うございます。なにしろ、この通りのせまい家うちですから」と、女房は気の毒そうに云った。

「もうおかまいなさるな。時にここのお弟子さんの其蝶さんは見えていませんかえ」

「来ています。呼びましょうか」

「呼ばなくてもいい。どこにいるか教えて下さい」

「あれ、あすこに……」

教えられた方を伸び上がって覗くと、狭い家だけに其の人はつい鼻のさきに見えた。彼は二つの死骸に最も近いところに行儀よく坐つて、だまって俯向いていた。膝と膝とが摺れ合うように坐っている人達のあいだに、行燈や燭台が幾つも置いてあるので、其蝶の蒼ざめた横顔は明らかに照らされていた。其月の死骸のそばには文ぶん台だいが据えられて、誰が供えたのか知らないが、手たむ向けの匂らしい短冊が六、七枚も乗せてあつた。

更によく視ると、其蝶はその右の手の小指を紙で巻いているらしかった。半七はふと思ひ出した。お葉の死骸の左の小指にも小さい膏薬が貼つてあつた。検視の時には誰も格別の注意を払わなかつたのであるが、其蝶が右の小指を痛めているのを見ると、両方のあいだに何か関係がないとも云えない。半七はもう一度お葉の死骸をあらためて見たいと思つ

だが、死骸に手をつけるには自分の身分を明かさなければならぬので、彼は又すこし躊躇ゆうちよした。しかしいつまで睨み合つていても際限がないので、半七は更に伸びあがつて声をかけた。

「もし、其蝶さん」

呼ばれても彼は俯向いたままで返事もしなかった。

「其蝶さん。この方が呼んでいますよ」

かの女房にも声をかけられて、其蝶は初めて顔をあげた。かれは大勢のなかを掻きわけて台所へ出て来た。

「どなたでございますか。どうぞこちらへ」と、彼はうす暗いところを透かしながら丁寧に云った。

「少しおまえさんをお願い申したいことがあります。わたしは神田の半七という者だが、御用でその死骸をあらために来ました」

「左様でございますか」と、其蝶はやや慌てたらしく答えた。

「なに、ちよいと覗かして貰えばいいんですから」

一応ことわっておけば仔細はないので、半七はつかつかと奥へ入り込んだ。大勢がじろ

じろと視ているなかを通つて、四畳半の死骸のそばへ立ち寄つたが、其月の方はもうあらためる要はない。半七はお葉の死骸の左手をとつて、その小指をよく視ると、小さい膏藥が湿れたままで付いていた。そつと剥がしてみると、なにか刃物で切つたらしい疵のあとが薄く残つていたが、それはもう五、六日以上を経過したものらしく、疵口も大抵かわいて癒合していた。この疵はゆうべの事件に関係のないことが十分に判つて、半七は失望した。

かれは更に其蝶の指の疵をあらためたいと思つたが、満座のなかではどうも都合がわるいので、再びかれを眼でまねいて、半七は台所の外に出た。その狭い空地には井戸があった。

「どうも宗匠は飛んだことだつたが、なにか心当りはありませんかえ」と、半七は車井戸の柱によりかかりながら先ず訊いた。

「どうもわかりません」と、其蝶はひくい溜息をついた。

「ここの家のことはお前さんが一番よく知つていふことだが、宗匠は人に遺恨をうけるようなことでもありませんかえ」

「そんな心当りはございません」

「このごろに何処へか金魚を売り込んだことがありますかえ」

「そんなはなしは聞きましたが、その売り先はよく存じません」と、其蝶は云った。「な
んでも道具屋の惣八がいかものを持ち込んだとか云つて、ひどく立腹していました」

「お葉という女は宗匠の妾ですかえ」

「さあ」と、其蝶は少し云い渋つていた。「なんだか世間ではそんなような噂をいたす者
もありませんが……」

「おまえさんは千住の元吉という男を識しつていますかえ」

「知りません」

「その元吉が宗匠を殺したという噂だが……。おまえさん、まったく知りませんかえ」

「知りません」

「おまえさんは指を痛めているようですね」と、半七は突然に云った。

其蝶はだまつていた。半七は衝つと寄つてその手首を強く掴つかんだ。

「どうして怪我をしたんだか、ちよいと見せてください」

半七はかれを引き摺るようにして台所の口へ戻ると、其蝶もやはり黙つて曳かれて来た。
そこにある蝋燭の火を借りて、半七は其蝶の右の小指を幾重にもまいてある新らしい紙を

解くと、疵口にあててある白い綿にはなまなましい血がにじんでいた。半七はその手首をつかんだままで、黙つてかれの顔を睨んだ。其蝶も無言で眼を伏せていた。

「もういけねえぜ」

と、半七はあざ笑つた。

「番屋まで来て貰おう」

其蝶はもう覚悟をきめたらしく、すなおに牽かれて表へ出た。

四

「これで一廉いっかどの手柄をした積りでいたところが、ちつと見けんとう当が狂いましたよ」と、半七老人は額をなでながら笑い出した。「まあ、だんだんに話しましょう」

息つぎに茶をのんでいるのが、わたしにはもどかしかった。わたしは追いかけるように訊きいた。

「すると、その其蝶が殺したのじゃあないんですか」

「違いました」

「じゃあ元吉という男でしたか」

「やっぱり違いました」と、老人はまた笑っていた。

なんだか焦^じらされているようで、わたしは苛^{いら}々^{いら}して来た。それと反対に老人はいよいよ落ちついていた。こういう話はひとを焦らしているところが値打ちだといったような顔をしているのが、きようは少し憎らしいようにも思われて来た。老人は茶碗を下において、しずかに又話し出した。

「其月を殺したのはお葉でしたよ」

「お葉……。その女中がどうして殺したんです」と、わたしは意外らしく訊きかえした。

「まあ、お聴きなさい。そのお葉という女は小娘のときから色^{いろ}つ早い奴^{ばや}で、十六の春から千住の煙草屋に奉公しているうちに、その甥の元吉と出来合ったことが知れて、その年のくれに暇を出され、あくる年からお玉ヶ池の其月のところへ奉公に出たのは、前にも云った通りですが、なにしろ主人は独り身、奉公人は色つ早い奴と来ているんですから、すぐに係り合いが付いてしまって、どうも唯の女中ではないらしいと近所でも噂されるようになったんです。そんな女ですから、前の男の元吉に未練もなく、元吉の方でもそのあとを追いまわすこともなく、その方はおたがい忘れてしまって、なんにも面倒はなかつたん

ですが、ただ面倒なのは今の主人の其月で、これがなかなか恪りんぎ気ぶかい男。尤もつとも自分はやがて五十に手のとどく年で、女の方はまだ十八、親子ほども年が違う上に、商売が宗匠ですから若い弟子たちも毎日出這入りする。お葉が浮わつた奴で誰にも彼にも色目をつかうのですから、どうもこれはまる円く行かないわけです。といつて、お葉は暇を取つて立ち去るでもなく、やはり其月の妾のような形で全二年も腰まるをすえているうちに、其月の焼餅がだんだん激しくなつて来て、時によると随分手あらい折せつかん檻かんをすることもある。ひどい時には女を素つ裸にして、麻縄で手足を引くくつて、女中部屋に半日くらい転がして置いたこともあるそうです。しかし近所の手前もあるので、そんな折檻も至極静かにする。女の方もどんな目に逢つても、決して声をたてるようなことはなく、不思議に歯を食いしばつて我慢をしていたそうです。それで主人の方でも逐い出さず、女の方でも逃げ出さず、不断はひどく睦まじく暮らしていたと云います。それは大抵の弟子たちも薄々知っていたのですが、そのなかで其蝶は一番親しく出入りをするだけに、とんだ折檻の場へ来あわせ、留め男の役をつとめたことも度々あるそうです」

「そんなに度々折檻されていたら、お葉のからだに疵あとも残つていそいなものでした
が……」

死骸を検視のときになぜそこに眼をつけなかったかと、わたしは半七老人の不注意を嘲りたいように思った。

「ごもつともです」と、老人はまじめにうなずいた。「まったく我々の不注意と云われても一言もないわけです。しかし其月の折檻は普通の継子ままごいじめなどのように、打ったり蹴つねったり抓つかったりするものではありません。ちよつとお話にも出来ないような、むごたらしいわいせつ猥褻な刑罰を加えて苦しめるのですから、死骸のからだを一応あらためたくらいでは判りません。そこはお察しを願います。そこで、其蝶がいつも仲裁役をつとめているうちに、根が浮気者のお葉ですから、そんな折檻にも懲こりないで、其蝶に色目を使うようになって来たんです。其月がむごい折檻をすればするほど、女は意地になってますます気を揉むように仕向ける。こんにちの詞ことばでいえば、両方が残酷な興味を持って来たとしても云うのでしようか。ところが其蝶という男は、まあ一種の偏人といったような人物で、むやみに俳諧と風流に凝り固まっているもんですから、お葉がどんな謎をかけても一向に取合わない。女もしまいに焦しれて来て、鉄釘流かなくぎの附文つけぶみなどをするようになる。こうなると、いくら偏人でも打つちやつて置くわけにも行かない。といって正直に師匠に訴えると、又どんな騒しぎを仕出し来ですかも知れないので、其蝶もその処置に困ってしまつたのです。そのうちに

お葉の熱度はだんだん高くなって、使に出た途中、まわり途をして其蝶の家へ押しかけて行くというようになったので、偏人もいよいよ困り果てたのです。なにしろ、こういう女を師匠の家に置くのはよろしくない、ゆくゆくどんなことを惹き起すかも知れないから、何とかして放逐させてしまいたいと思つたが、師匠にむかつてどうも明らさまにも云い出しにくいので、その後は句の添削てんさくをたのみに行きたびに、二、三句のうちいきつと一句ずつは落葉とか紅葉とかいう題で、おち葉を掃き出してしまえとか、紅葉を切つて捨てろとかいうような句を入れて行つたそうです。お葉という女の名から思いついた謎で、なるほど風流人らしい知恵でした。いつもいつも同じような句を作っているので、宗匠も少し変に思つていると、一番最後に持つて来たのが、『落葉して月の光のまさりけり』とかいうのだそうです。落葉は例のお葉で、月は其月の一字をよみ込んだものとみえます。お葉を逐おい出してしまえば、其月のひかりも増すという意味。それを讀んで、其月宗匠も初めてさてはと覺さとつたのですが、それを又いつもの焼餅から妙にひがんで考へてしまつたんです」

「其蝶とお葉とが訳があると思つたのですか」

「そうです、そうです。これは二人がいつの間にか出来合つていて、女が師匠の家について

は思うように媾あいびぎ曳も出来ない。さりとて、自分から暇を取っては感付かれると思って、
 なんとかしてこつちから暇を出させ、それから自由に楽しもうという下したころ心だろうと、
 悪くひがんで考えてしまつて、なにしろ、その方のことになると、まるで半気違いのよう
 になる人なんですから、唯むやみに悪い方ばかり考えてしまつて、例のごとくお葉をい
 じめ始めたんです。ことに今度は其蝶ほつくの発句という証拠物があるのだから堪まりません。
 お葉はもう我慢が出来なくなつたと見えて、其蝶にあてた長い手紙をかきました。こんな
 に主人から無体に虐いじめられてはとても生きてはいられないから、いつそ主人を殺してしま
 つて、お前さんのところへ駈いけ込んで行くというようなことを書いて、自分の小指を切つ
 た血を染めて、それをそつと其蝶にとどけたので、受け取つた方ではおどろきましたが、
 まさか本気でそんなこともしまい、嚇おそしに書いてよこしたのだらう位に思つて、四、五日
 はそのままに置いたのが手ぬかりでした。お葉が左の小指の疵はその時に切つたものとみ
 えます。そこで、四、五日経つてから其蝶がお玉ヶ池へ出かけて行くと、それが丁度かの
 一件の晩で、まだ宵の五ツ（午後八時）頃だつたそうです。いつものように門をあけては
 いると、四畳半は一面の血だらけで、師匠は机のまえに倒れているので、あつと思つて立
 ちすくんでしまうと、三畳の女部屋で其蝶さん其蝶さんと呼ぶ声がする。それがお葉だと

は知りながら、其蝶はたましいが抜けたように唯ぼんやりしていると、やがて女部屋から、お葉が出て来た。旦那様はわたしに殺してしまつたと平気で云うので、其蝶はいよいよおどろきました。まつたくお葉は主人を殺すつもりで、其月が俳諧の点をしている油断を見すまして、うしろから不意に剃^{かみそり}刀で斬り付けたんだそうです。まだ驚くことは、そうして主人を殺して置いて、血のついた手を台所で綺麗に洗つて、爪まで取つて、着物も別のものに着かえて、血のはねている着物は丁寧にたたんで葛籠^{つづら}の底にしまい込んで、それから髪をかきあげて外へ出る支度をしているところであつたそうで、馬鹿といふのか、大胆といふのか、あんまり度胸がよすぎるので、其蝶も呆氣^{あつけ}に取られてしまつたそうです。「それでしよう」と、わたしも思わず溜息をついた。

「いや、それからが大変」と、老人は顔をしかめた。「あきれてぼんやりしている其蝶をつかまえて、お葉はこれからお前さんの家へ連れて行つてくれと云う。其蝶はもう呆れるというよりは、なんだかむやみに恐ろしくなつて、碌々に返事もしないで突つ立つていると、お葉は急に眼の色をかえて、こういうところを見られた以上は唯は置かれぬ。素直にわたしを連れて行つてくれるか、さもなければここでおまえさんも殺してわたしも死ぬと云つて、其月を殺した剃刀をつきつけたので、其蝶も絶体絶命、それでもさすがは男

ですから無理に女の刃物を引つたくつて、半分は夢中で庭さきへ逃げ出すと、お葉もつづいて飛び降りてくる。そのはずみに自分の帯が解けかかつて、それに足をからまれて、お葉はよろけながら池のなかへ滑り込んでしまった。其蝶はおそろしいのがいっぱいですから、あとがどうなったか振り向いてもみないで、転がるように表へ逃げ出して、一生懸命に自分の家へかけて帰って、入口の戸を堅く締め切つて、息を殺して夜の明けるのを待っていたそうです。右の小指の疵は、お葉の手から剃刀をうばい取るときに自分で突き切つたので、その当座は夢中でしたが、あとでだんだん痛んで来たので、初めてそれと気がついたということですよ」

「其蝶はなぜ早くそれを訴え出なかつたんでしようね」

「わたくしも一旦はそれを疑いましたが、其蝶の申し立ての嘘でないことは、お葉の血染めの手紙をみて判りました。それまでに来た附文はみんな裂いてしまつたんですが、最後の手紙だけはそのまま机のひきだしに入れてあつたので、其蝶のためには大変に都合のいい証拠品となりました。其蝶がなぜそれを訴えなかつたかという点、それを表向きにすれば内輪のことを何もかもさらけ出さなければならぬ。それでは第一に師匠の恥、第二には自分も何かのまきぞえを受けるかも知れないと、それを気づかつて黙っていたのです。

師匠を殺した相手がわからなければ格別、本人のお葉はもう自滅しているのだから、素知らぬ顔をして有耶無耶うやむやに葬つてしまふ積りであつたらしいのです。知つていながら黙つていたというのは悪いことですが、事情を察してみれば可哀そうなところもあるので、其蝶はまあ叱るだけで免ゆるしてやりました」

「そうすると、金魚の方はなんにも係り合はないんですね」

「それは確かに判りません」と、老人は云つた。「なにを云うにも肝腎の其月が死んでしまったので、その売り先が知れません。だんだん探つてみると、どうも浅草の札差ふださしの家にいらしいのですが、こうなると先方でも面倒のかかるのを恐れて、一切いっさい知らないといひ張つていますから、どうにも調べようがありません。元吉や惣八が、人殺しにばかり合ひのないことだけは明白ですが、金魚の方は、ほん物かい物か、とうとう判らないことになりました。勿論、こんな変りものは買う方も悪いということになっていましたから、たといいか物を売り込んだことが知れても、重い罪にはなりません。冬の金魚も変りものですが、この宗匠も女中も人間のなかでは変りものの方でしょうね。こんにちのお医者にみせたら、みんな何とかいう病名がつくのかも知れませんよ」

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（三）」 光文社文庫、光文社

1986（昭和61）年5月20日初版1刷発行

1997（平成9）年5月15日初版1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：網迫

校正：（い）ま（い）ま

2000年12月21日公開

2011年2月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

半七捕物帳

冬の金魚

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>